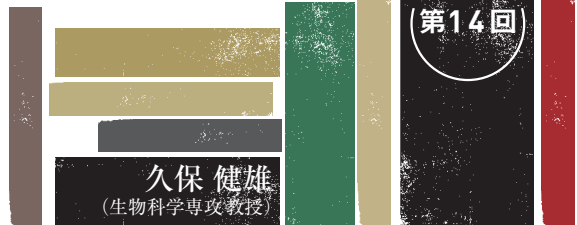


理学の本棚

新・生命科学シリーズ 「動物行動の分子生物学」

臨海実験所長の赤坂甲治先生から2011年に「動物行動の分子生物学」に関する本を書いて貰えないか、との打診をいただいた。お引き受けして直ぐ、浅学な私一人では執筆は不可能と気付き、赤坂先生にお願いして、研究室卒業生である竹内秀明君(岡山大准教授)、上川内あづきさん(名古屋大教授)、奥山輝大君(MIT 利根川進教授のラボの研究員)と共著で書かせていただくことにした。

私はミツバチの社会性行動の分子・神経基盤を研究テーマの一つとしているが、竹内君と上川内さんはその最初期の大学院生であった。上川内さんは卒業後、分子細胞生物学研究所の伊藤啓先生らと2009年にNatureにショウジョウバエの聴覚に関する論文を書いた。奥山君は、竹内君が当研究室で始めた、メダカの社会性行動の分子遺伝学に携わった最初の大学院生で、2014年にScienceに「メダカの雌は見知った雄と積極的に交接する」という論文を書いた。奥山君には近年勃興したオプトジェネティクスに関する章を執筆してもらった。線虫・ショウジョウバエ・メダカ・マウスは遺伝学が利用できる「モデル生物」だが、ミツバ



チはまだ遺伝学が利用できない「非モデル生物」である。そのため本書のタイトルは「分子生物学」となり、「分子遺伝学」にはならなかった。次にこうした本を上梓する機会があれば、そのタイトルは「ミツバチの社会性行動の分子遺伝学」でなくてはならないと思っている。



久保健雄・奥山輝大・上川内あづき・竹内秀明共著
新・生命科学シリーズ「動物行動の分子生物学」
裳華房(2014年出版)
ISBN 978-4-7853-5858-7

温故知新 第11回

石田 貴文
(生物科学専攻 教授)

いつの時代も 周知は難しい

先日、転居後の片付けの最中、1枚の紙片を学生時代に読んでいた本の間に見つけた(図)。1981年(昭和56年)度大学院関係行事予定表、大学院学年限、諸手続に関する注意、理学系研究科委員会開催予定表と委員名簿が、表と裏に印刷されていた。三つ折りにすると、どんな手帳にも挟める大きさになる。締め切りはいつか、相談は誰にするかといった、情報満載の虎の巻が携帯できる形で全生に配布されていたことに驚きを感じた。だが、奨学金や授業料免除の書類を出しに行くと、往々にして締め切り後であった。それは院生(私)の不注意で、虎の巻が長年本の葉と化して



34年間本の葉となっていた大学院生向けの葉

いたためである。今は、教職員・学生への事務連絡にもメール配信が活用され、迅速かつ確実に情報が伝達されている、はずである。それなのに、締め切りを過ぎてから出される〇〇届の数は減らない。

時は流れ媒体は変貌しても、周知徹底は難しい。皆様、スパム設定は慎重に。